

文化論集第24号
2004年3月

消 息

都倉義孝先生のご定年退職にあたって

古稀をお迎えになった都倉義孝先生は、本年三月末日をもって退職されることとなった。大学の規定とはいえ、さびしいことだ。とりわけ筆者は都倉先生とは同期の桜であるだけになおさらその感が深い。1978年4月、専任講師として共々本学部での第一歩を踏み出して以来、まことに光陰矢の如く、はや優に四半世紀の歳月を闊したと思うと、いささかの感慨なきをえないのである。

恒例にならってまず先生の履歴ならびに業績を要約したい。早稲田大学第一商学部を1959年に卒業された都倉先生は、文学への思い絶ち難く第一文学部に学士入学、つづいて文学研究科修士課程に進み、日本文学とりわけその上代の研究を重ね、66年博士課程を終えられた。同年ただちに国語担当教諭として早稲田高等学院に赴任。72年から第一文学部および法学部の講師を兼担、さらに翌年からは商学部の講師を兼ねた。78年高等学院を退任して商学部の専任講師となり、80年助教授、85年教授になられた。先生は本学部に於いて、広く文化論的視野から日本文学や国語表現法を講義する傍ら、大学院文研日文専修で専門領域について後進の指導にあたり、またエクステンション・センターでは「万葉集」を講じその名調子で老若男女を魅了した。

先生は「古事記」「万葉集」を中心に上代文学の研究を長年にわたって続け、数多くの注目すべき論文を公にされてきた。筆者はそれに関してあれこれ言う資格はないのであるが、斯界の評判を参考にすれば、主著『古事記 古代王権の語りの仕組み』（95年）所収の諸論考、なかでも古代王権の聖性の基盤を考察した二編と、古代歌謡をめぐる数篇は専門家の刮目するところとなり、また旧作「大津皇子とその周辺」（72年）「羈旅八首」（76年）等は今日に至るも当該歌に触れた論文に必ず引用されるものである。しかし筆者には、平易に楽しく語りながら文化人類学的切れ込みの入った『万葉びとの四季』（96年）がより親しい。折にふれてひもとく愛読書の一つと言っても過言ではない。著者自らの手による幾葉もの写真に彩られた美しい本である。

さて商学部に於ける都倉先生を語って、入試のことに一言ふれぬわけにはいかないだろう。先生は25年間の長きにわたり、一貫して国語の出題ならびに採点の責任者の重責を担ってこられた。入試にミスは許されない。早稲田の試験で何か事がおこればたちまちマスコミの好餌となろう。大きな重圧のもとでの毎年毎年の問題作成はさぞかし大変だったと思う。夏休みの半ばはそれに費やされた、と言ってもよいだろう。長年の間本当にご苦労であったと思う。筆者も何度か同席したが、毎年秋の第一回出題委員会に先生が出される草稿は、最初からいつも限りなく完成品に近かった。細心綿密かつ周到なものであった。やがてそれは、論理的思考力を試すに適切な格調高い問題、との定評を受験界で得るにいたる。

都倉さん（以下お許しを願ひ先生というのはやめにしたい）とは幾度か旅を共にした。というより、行程から宿から鉄道切符まですべて都倉さんが按配した旅行にお供した、と言ったほうがより適切だろう。出雲の旅はよかった。なべて神の社^{やしろ}はなまめかしきものなり、とは兼好法師の言葉だが、人の訪れるのも稀な古社を、荒涼とした海浜にあるいは奥深い山里に、一つ一つ尋ね歩いた。しみじみと心にしみる旅だった。京都には数回出かけた。宮内庁書陵部の都倉さんの友人の配慮で拝観できた、新緑の桂離宮と修学院離宮。至福の時である。そうそう鞍馬に詣でたあと、夕闇迫る川沿いに紅葉の貴船街道をとぼとぼ辿ったこともあった。吉野の桜もなつかしい。ちょうど中の千本が満開のときで、それはやはり見事であてやかなものだった。

都倉さんの趣味は多彩である。高等学院時代は教職員野球チームのエースとして活躍、長身からピューと投げ込む速球ならぬスローボールは大いに敵を悩ませたらしい。そして登山。植物写真とりわけ高山植物の撮影は玄人はだしの都倉さんは、大きなカメラを担いで一時毎年のように北アルプスの山々に出かけられた。それから、たつぷり汗をかき体をしばった後のビールがこよなくうまい、と言うのが口癖だったテニス。目下いささか体調不良ゆえ休憩中だが、ちかく再びその雄姿がコートに見られることであろう。

句歴は20年以上になられるであろうか。俳句結社「^{てん}貂」の同人として活躍し、また俳人協会会員でもある。その作句のいくらかは数種の歳時記の採用するものであるが、本稿にもお得意の花の句から少々、

ま横から曙光一気やなざらん

空か海か雲か山か岩桔梗
くがい草上下左右に蝶と虻
葉の裏を拭いて活けたる玉椿
^{さんしゅゆ}
山菜莢の花に夕日の沸きかへる

都倉さん，いろいろとありがとう。又ぶらっとどこかに出かけませんか。そしてゆっくり一献傾けませんか。

主な業績

- 著 書：古事記 古代王権の語りの仕組み（1995・8）有精堂
万葉びとの四季（1996・5）有精堂
- 編集執筆：万葉集事典（1975・11）有精堂
日本文学史辞典 古典編（1982・9）角川書店
- 分担執筆：日本文学研究の現状 古典（1992・4）有精堂
日本神話事典（1997・6）大和書房
- 論 文：大津皇子とその周辺『万葉集講座 5』（1972・12）有精堂
羈旅八首『論集柿本人麻呂』（1976・4）早大出版
東歌・防人歌『和歌文学論集 1』（1993・10）風間書房
仁徳・雄略そして顕宗・仁賢の物語『国語と国文学 12月号』（1993・12）
東大出版
- 石之日売の嫉妬物語を読む『古事記研究大系 9』（1994・2）高科書店
歌垣と求愛『古代文学講座 4』（1994・8）勉誠社
神と天皇の変容『古事記研究大系 1』（1997・3）高科書店
人麻呂と王権『柿本人麻呂 全』（2000・6）笠間書院
履中記の論『古代文学の思想と表現』（2000・1）新典社
橘諸兄の歌『万葉の歌人と作品 11』（2004・2）和泉書院

野 村 圭 介